# 道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

## ☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

昨年10月、撮影に合わせて奇跡の復活。以来倒れてませんでした。

三好礼子
エッセイスト・元国際ラリースト
～http://www.fairytale.jp/～

「馬と一緒に暮らしたい」と思ったのは小学生でしたが、実現したのは富士山麓に住んでいた2005年。通っていた乗馬クラブの方が、「初めて飼うならサラブレッドよりこっちがいいよ」と、14歳の牝馬（シェットランドポニー）を譲って下さったのです。ずっと側にいた父親が大往生を迎えたばかりで、「寂しがっているから懐く」という意味もあったのでしょう。けっこう気が強いよと噂されるその子（ウランちゃん）を見にいくと、目があい、ピピン。すぐに家族となりました。

既にアドベンチャーレースで野山を走っていたので、乗馬で裏道を開拓してあちこち行きたいなと夢も広がります。まずは5キロ先のコンビニや10キロ先の郵便局までと思ったのですが、ウランは小柄すぎ、私は少し大きすぎました。それならばと引き馬に転向し、裏の防風林へ。前を行く私のすぐ後ろをぴたっと同じ速度で走ったり歩いたりするウランの可愛いこと。倒木を超え、坂を駆け下り、溝をジャンプする荒くれコースですが、すぐに散策にも適した「馬道」ができました。途中で草を食んでいる間に私は本を読んだり、ランチを食べたり。馬との遠足はそれなりに体力を要するし、そこに至るまでの小屋作り、柵作りはなかなか大変でしたが、ウランのために出来ることをやるのは苦ではありませんでした。

そもそも静岡県から長野県に引っ越したのも、ウランがきっかけ。買って与えた乾草餌も放牧していた草地もポニーには栄養価が高すぎ、あっという間に蹄葉炎（ていようえん）という蹄の病気にかかり、倒れてしまったのです。痩せさせて粗飼料にして運動させる介護の元、なんとか復活しましたが、種の栄養価が高くなる春と秋には必ず横に。目指せ、牛の放牧地よりスキー場などの野草の大地！　もちろんヤギチーズ作りの夢もあったのですが、そのヤギを飼い始めたのもウランが幸せになるためでした。獣医師の意見の中に、「本来、群れの動物。寂しがっているのでは」というのがあったからです。それは大正解で、来た途端に大喜びし、以来ヤギが馬化し、馬がヤギ化するほど仲良くいつも一緒でした。ひっくり返っても、ヤギ達に囲まれた中で、復活。今年で27歳（人間で言うと、100歳前後）なので、周りからは「神馬」と呼ばれ愛されていました。

元々蹴ったり噛んだりはありませんでしたが、さらに穏やかになり、見ただけで誰もを虜にする優しさがありました。我が家に来た時から自分より弱い立場に寄りそう不思議な性格で、拾われた保護犬を預かっていた時にそれは発揮されました。自分が立てないほど蹄が痛い時でも、なんとかして近寄り、ずっと側にいてあげるのです。ヤギの赤ちゃんが生まれると、すぐに寄っていって遊んであげるし、心の病で遊びに来た友人にも、同じようにただそっと寄り添います。無言なのにこんなに優しく命を包んであげられるって凄いといつも感動していました。

しかしこの2月、いつもの放牧地の急坂（アイスバーン）で滑って脚を捻挫。全く立てなくなり、32時間後に静かに息を引き取りました。夫婦で日向に運び、水と食事を与え、体を冷やさないようにとあれこれやりましたが、あっという間でした。たまたま長い原稿を書いている時だったので、少し書いては側にいて、を繰り返し、最期までずっと話ができました。でも、何度も死を覚悟していたのに、お互い幸せな時間を過ごせて悔いはないはずなのに、いなくなるとその悲しみは、堪え難い大きさでした。大事な家族（子供）だったことに改めて気づかされ、嗚咽と号泣が止まりません。

そんな中、大爆笑の出来事も。今まで冬に近づくヤギたちは埋葬できないので、深い雪の中に埋めて春を待ったのですが、今年はその雪が全くないのです。仕方なく庭に馬塚を作ろうとツルハシ持ったものの、日陰の凍土では全く歯が立ちません。ご近所の重機で大きな穴を掘ってもらいましたが、70センチの凍土を崩すだけで半時間。アナどれない厳しい自然の中にいるんだなあとつくづく。

ウランが私に残してくれたのは、「生きる力」。それも死の淵から何度でも再生し、その度に慈悲の心が大きくなるという深い愛。そんな愛を持ったヒトに私はなりたい（宮沢賢治風）。ウラン、修行が終わるまで待っててね―！

**写真／在津完哉・ホタパパ**

昨年４月。ウランの目力は亡くなる直前まで変わりませんでした。

馬場を一緒に走るのも愉快な運動。ムチ要らずのアイコンタクト。

生まれた時から一緒だったヤギ達と敷地を散歩するのが日課に。

半年経った頃。ワンコも加わり、毎日新鮮な発見がありました。

ウランを育てた牧場主の宗形さんに運んでもらって松本に来た日。

## 都市計画の中の道路⑫
## 社会改良主義者の理想都市における街路（その4）

東洋大学国際学部・准教授
志摩憲寿

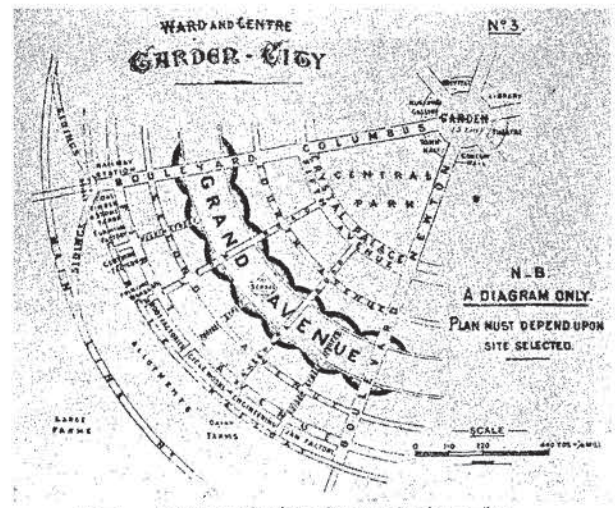
引き続きハワードの田園都市における街路を取り上げたいと思います。ハワードの田園都市では都市圏レベルでは道路よりも当時の最新技術の高速輸送手段、すなわち、鉄道が重視されていましたが、都市内では街路はどのように扱われていたのでしょうか。

ハワードは図のような都市のモデルを提案しています。そのモデルによると、都市の中心に5・5エーカー（約10ヘクタール）の庭園があり、これから放射状に幅員120フィート（約36メートル）の並木道（ブールバール）が6本伸びていて、都市を6つの地区に分けています（図ではコロンブス通りとニュートン通り）。庭園に面して公共施設（公会堂、ホール、劇場、図書館、博物館、美術館、病院など）があり、公会堂の外側には中央公園、さらにその外側にはガラスのアーケード「水晶宮（クリスタルパレス）」が置かれています。アーケードを通って住民は荒天でも中央公園へと足を運ぶことができます。また、環状道路は中心に近いものから5本が設計され、3番目と4番目の環状道路の間は、広幅員420フィート（約128メートル）の大通り（グランドアベニュー）で、その中には長さ3マイル（約4・8キロ）の緑地帯があり、緑地帯には小学校や協会が配置されています。さらに、グランドアベニューに沿う住宅を三日月状に配することによって、グランドアベニューがますます広く感じられるよう設計されています。一方、一番外側の環状道路には、石炭・石材・材木の集積場、家具工場、衣料工場、印刷工場、製靴工場、自転車工場、ジャム工場など（田園都市のねらいの一つに雇用の場の確保がありました）が見えますが、ここへは環状道路から引込み線が入っています。なお、人口3万人を収容する都市内の住宅は、グランドアベニュー沿いだけでなく、いずれかの放射道路か環状道路に面して建ち並んでおり、住民は最も遠くに住んでいようとも240ヤード（約219メートル）以内で公園にアクセスすることができます。

そして、ハワードは、こうした物理的な都市設計のみならず、整備費用や維持管理費用などの収支構造も検討していますが、これだけ壮大な街路を整備するのですから、街路の整備費用だけで全整備費用26万3千ポンドのうちの10万ポンドと見積もられていますが、これらは建物の所有者による負担、すなわち、受益者負担が原則であると記しています。

ハワードの田園都市における都市内街路は壮大なものではありますが、グランドアベニューに代表されるように設計においては公園街路があり、かつ、（この公園街路を含む）公園へのアクセスが配慮されるなど、当時都市化が急速に進んでいたロンドンの過密問題に対する処方箋として街路がうまく活用されています。

参考文献：E・ハワード（1968）「明日の田園都市」鹿島出版会



ハワードの田園都市における都市モデル
（出典：ハワード（1968））

## ハッと思いました

桃の節句を迎え、彼岸の時期になると、日本各地の天候状況は様々で、冬の後始末に追われたり、新年度からの新しい生活の準備に追われたりと、日本は南北に長いなぁと感じます。

先月は強い寒波に見舞われ記録的な豪雪による被害が出た月でした。見る見るうちにクルマが雪に埋まり車内に缶詰め状態になったドライバーたちはさぞ不安なことであったと思います。

誰もが大好きSNSでピンポイント的に情報のやり取りはできる様になりましたが、口に入れる野菜や肉、魚、パン、インスタント食品など、店頭からあっという間に姿を消してしまい、病院にも行けず、不安で心細い時間を強いられた人も多くいました。こんな状況に陥った時、どうしたらいいのか、何ができるのか、色々と考えさせられます。

さて、時は確実に過ぎ、人々の望むものも日々変わります。この変わると言うのは、良く言えば、進化でしょうか。斜に見れば、文化の崩壊?。クルマの進化はSFアニメの世界に近づきつつあるようで、至れり尽くせりの運転支援や自動運転など。ふと思うのが、今後、社会はどこまで人間を排除していくのだろう?

進化した車両の一つである電気自動車の運転について小さな不安があります。それは、アクセルペダル一つで、加速、減速、停止まで可能のクルマが同じ土俵に存在するようになったことです。アクセルとブレーキを踏み間違える事故が増えている中、ワンペダルで解消に向かうものと考えているのだろうか。もはや現在、自動車教習所で教わる運転とは、異なる教習を受ける必要があるレベルでは。販売するメーカーには、商品の安全な利用法をユーザーに個別レクチャーする義務があるのではと思うのです。